ヨーロッパの旅

平井信義

宿屋――旅先きで宿泊をする時の建物であることには違いはないが、これを英語に訳したら何と言ったらよいのだろう。それは「ホテル」といったらよいと言われる方があるかも知れないが、日本の宿屋といった時に思いうかべる雰囲気と、ヨーロッパのホテルの雰囲気とは、同じ宿泊する建物であっても、全くちがった趣きを持っている。

私は今、九州の温泉宿で筆を走らせているのであるが、その宿には○○ホテルという名前がついている。ホテル――ということばをきくと、帰国後四年にもなる私であるが、まだヨーロッパの旅で味ったホテルの雰囲気の、何分の一かを頭において期待するのであるが、このホテルには、全く西欧式の雰囲気がない。目がさめて、入浴を楽しんでいる間に、女中さんが寝具を片付けてくれていた。私の部屋には、私を安らかにつつんでくれていた布団は既に無いのである。そして、私が湯上りの一と時を楽しんでいると、女中さんが「おうす」を持ってきてくれた。一と時の静寂である。ヨーロッパには無い趣きである。

ヨーロッパのホテル――それは大きいホテルもあり、パンジオン（長期逗留のための比較的小さな安いホテル）もあるが、その仕組みは大体一定している。ホテルの入口に着くと、ボーイさんがいる。そして荷物を持ってくれる所もあり、戸口をあけてくれるだけのこともある。しかし、女中さんが荷物を持ってくれる所はどこにもない。女性に荷物を持たせることは禁忌であり、男性にはそれだけの腕力があるはずであるから……。

そして、クロアクにいく。番台とでも訳すのだろうか。受付とでもいうのだろうか。我が国の宿屋にはそれに応しいものはない。すぐに女中さんが部屋に案内してくれる、そのあとに従えばよいのだ

から。ところが、ヨーロッパでは、そのクロアクに、いかめしく正装した番頭さんがいる。いかめしいと感じたのは、東夷（あずまえびす）のためかも知れない。少なくとも、私より立派そうに見える服装の男性が、私に応待するのである。先ず旅券を見せる。そして別の紙に、必要事項を書き記すのである。部屋に入ったあとから、「宿帳をお願いします」というのとはちがう。最初の契約みたいなものである。そこで、部屋の値段を交渉する場合もある。予め依頼してあった部屋の番号を教えてくれることもある。そして、いよいよ鍵を渡されるのである。

その鍵も、なまやさしいものではない。鍵に連結して、小型の赤いボールのようなゴム球がついていることもある。部厚い金の板がついていることもある。ポケットに入れられることもあるが、それを下げて歩かなければならないこともある。しかし、これで我が部屋を獲得できたことになる。その部屋までは、ボーイさんが案内してくれることもあり、女中さんが案内してくれた所もある。その時には、チップを渡さなければならない。貧しい私には、チップを取られることが脅威であった。そのような時は、自分で持っていくと言えばよい。しつっこく「持っていきます」などは決して言わない。その時は、その人の好意の上でのこととなり、チップをもらうことが出来ないからである。勿論、小さい宿屋では、ボーイさんの好意にすがったこともあったが……。

部屋に入り、中から錠を下ろす。そうなれば、その空間は我が憩いの場となる。誰からも妨げられることはない。直ちに、ベッドに疲れた体を横にしてもよい。すっ裸になって体を拭いてもよい。全く自由な天地がひらけるのである。そして、ひとりだけの静寂を味うことになるのであるが、日本の宿屋の雰囲気になじんだものにとっては、郷愁が涌き起こる一瞬でもある。

その後に至っては、全く誰にも妨げられることはない。一日そこに寝ていても、かまわないのである。風呂付きの部屋であれば、その風呂に自分で湯を入れ、水を入れて、湯加減さえみれば、何回入ってもかまわない。私はそんな時に、よく洗濯をした。但し、一日二回くらいは、女中さんが入って来る。一回は床やその他を掃除するためであり、一回はベッドを作るためである。そんな時に、こちらから口をきく気があれば、女中さんとの交渉が成立するわけであるが、愛想がなくても一向差し支えないのである。

勿論、食事は食堂へ食べにいく。その時間がきまっているから、別に呼びに来るわけでもない。まして、女中さんがお膳をかかえて汗水たらしながら右往左往する光景は、全く見ることが出来ない。食べたくなければ、食べなくてもかまわない。そのホテルの食事が気に入らなかったり、或いは高いような時には、外食すればよい。ホテルの代金は一泊の代金であって、一泊二食ではないからである。そして、女中さんを相手に、一杯飲みながら、四方山話をする

ことの出来るのは、我が国ばかりである。

旅行をしている子ども連れといえども、この方式とちがわない。

しかも、よく見かける光景は、夫婦の食卓と子どもたちの食卓とがちがうことである。夫婦だけが差し向いで食事している。その隣りに三人の子どもがちょこなんと食事している。四、五歳以上ともなれば、そうしていて別にママのところを恋しがるわけでもない。せっせと箸を——ナイフとフォークを動かしているのである。時時、ママが子どもの様子を伺ったり、めくばせをしたりすることもあるが、概して夫婦は話をしながらそれぞれの食事をしているのである。

こんな時に、我が国とのちがいを沁々と思うのである。旅先に来ると、それが汽車の中であろうと、宿屋であろうと、妙に家族意識が強くなる。むやみに座席を一しょにしようとし、固まって食事をしようとする。普段、ばらばらに食事をし、家族全員が一しょになって遊んだりする機会が少ないので、ここぞとばかり一しょになろうとするのであろうか。或いは、ヨーロッパの家族の意識と我が国とではちがうためなのであろうか。

西ドイツでも、スイスでもイタリーでも、何組かの親子連れの旅行者と一しょになった。食堂を出て自分の部屋に帰る時、よく、それらの家族とエレベーターで一しょになった。ところが、夫婦の入っていく部屋と子どもの入っていく部屋とがちがうのである。従って、出て来る部屋もよくちがうのである。子どもたちは、ホテルに泊ったという興味で、戸口から出たり入ったりしている。しかし、親たちの戸口は隣りであったり、斜め向い側であったりしている。これは、金持ちの家族のしきたりばかりではない。どうせ私の泊った多くのホテルは、中流以下である。中流以下には何と言っても中流以下の家庭の人たちが泊るのであるから、こうしたしきたりは、極く一般なのであろうし、家庭では、当然、両親の寝室と子どもたちの寝室とは分けるのであるから、少しもふしぎはない。

両親の寝室は、子どもによって妨げられてはならない——というのが、欧米における生活の原則と考えてもよい。夫婦の寝室は、夫婦が愛情を交換するための重要な場所なのである。欧米の文学で、もし「母親がその寝室に入った」という文章があったとしよう。その時には、子どものことから離れて、自分の憩いの場所としての寝室、或いは夫婦が愛情を交換するための寝室——そうした寝室へ入ったということになるのである。或いは、「子どもたちが寝ている部屋に入った」という時には、子どもたちに「お休み」を言うためか、静かに寝ているかどうかを見るために入った——ということになる。

我が国の場合はどうだろう。「子どもたちが寝ている部屋に入った」ということは、その横でゴロッと添寝をする母親か、子どもの横に敷いてある布団に入るためか——ざっとそんなところであるは

ずである。

私がこのようなことを言うわけは、一つことばにせよ、一つの文章にせよ、それを読んだものの生活がちがっていれば、当然そこにはちがった雰囲気が頭にうかんでいるということを、第一に言いたかったからである。外国文学を研究している友人と、「一体、翻訳というものができるのだろうか」と話し合ったことがあるが、ヨーロッパの生活を背景として描かれた文章を翻訳する時、一つ一つのことばの持つ内容がちがうのだから、正確なニュアンスを出すことは、極めて難しいことと思われる。実は、このことが、子どもの問題についても言えるのであって、ヨーロッパの子どもや、その他の国々の子どもとか家庭のしつけについての翻訳が、ずい分意味や内容をとりちがえて伝えられ、受け取られているのではないかと、恐れるのである。親子間の愛情といっても、具体的となると、異っているし、拒否的な親といっても、その拒否が持つ内容は異っている。殊に、拒否的な親などという場合には、その拒否の持つ内容が非常に異り、我が国で拒否ととられるような親の言動が、ヨーロッパでは極く当り前だったりする。子どもを拒否する親は、しばしば子どもの存在をも拒否し、自分で養育する気持がないような例が頭にうかぶのである。

このような点で、ヨーロッパの親たちや子どもたちに、同じような質問を立ててそれに答えさせてみても、その意味の取り方によっては、イエスやノーが随分異ってくるはずであるし、絵による診断などでも、その解釈の仕方も、おのずから、ヨーロッパで行なわれているような解釈を我が国の子どもの例に当てることが無理となろう。こうしたことについて思うことは、終戦後、欧米からの教育、しつけ、その他諸々の紹介が、じゅうぶんに消化されないままに紹介され、それを鵜呑みにして、実際の教育に当ることが多くはなかったか——ということである。戦後十五年——ということばがよく使われるが、このあたりでもう一度、我が国の子どもや家庭が直面している問題について、じっくりと考え直してみることが必要ではないかということである。

第二に、親子関係を、ヨーロッパの場合と我が国の場合とについて、具体的な現実について比較して、問題の所在をはっきりさせるということである。我が国の家庭も、着々と西欧の文化の影響を受け、それによって変容しようとしている。最近、養護施設に受託される子どもの理由なども、一歩一歩、ヨーロッパで起きている子どもや家庭の問題を思い出させるものがある。ヨーロッパの家庭や子どものしつけが、決して絶対的なものではない。多くの欠陥を持っているのである。欧米の文化の影響を受けるにしても、そこに見られる欠陥をふるいにかけながら取入れていくことが、賢明な日本の保育者の仕事ではないか。いまこそその時が来ている——と、しみじみ思うこの頃である。